

<論文>

羽化したばかりのゴフマン社会学 —第二公刊論文（1952）に関する一考察—

薄 井 明*

抄 録：アーヴィング・ゴフマンはPh.D.論文（1953年）で「相互行為秩序」論の枠組みを確立し、その精緻化と肉付けを自らのライフワークとして追究した。Ph.D.論文の一年前、彼の二番目の公刊論文「カモを宥めることに関して」（1952年）が雑誌『精神医学』に掲載された。この論文でゴフマンは、突然の地位喪失における慰めの多様な過程を、信用詐欺においてカモを宥める作業になぞらえながら、それらに共通する対人過程の形式を抽出している。筆者は、この論文をもってゴフマン社会学の“誕生”と見なす。その理由はまず、ケネス・バークが創案しエヴァレット・C・ヒューズが比較社会的な方法に発展させた「異事象併置による透視図法」をゴフマンが本論文で初めて適用したからであり、次に、自己の捉え方、のめり込み、当惑、アサイラムといったゴフマン社会学の重要な用語や発想をすでに本論文で活用しているからである。

キーワード：カモを宥めることに関して、地位の喪失、のめり込み、当惑、異事象併置による透視図法、ゴフマン社会学

1. 序—問題提起

社会学者アーヴィング・ゴフマンの三十年にわたるライフワークとなった「相互行為秩序」論の骨格が彼のPh.D.論文（1953年12月）で定式化されたということは定説になっているといってよい。しかし、その理論枠組みがいつ、どのようにして形成されたのかという論点に関しては確定的な答えが出されたとは言いがたい。

Ph.D.論文提出の前々年に論文「階級ステータスのシンボル」[以下、「階級」論文]が、前年に論文「カモを宥めることに関して」が公刊されているが、それらとPh.D.論文の関連性が見出しにくいだけでなく、二つの公刊論文にも共通点があるようにみえない。こうした印象をつなぎ合わせたところに、Ph.D.論文のためのシェトランド諸島調査（1949年10月から1951年5月）のどこかの時点で“突然”ゴフマンが「相互行為秩序」論を着想したという不自然なストーリー（Winkin 1988；Smith 2006）が成立してしまっている。

こうした従来のゴフマン社会学形成史の理解に対して

筆者は、彼が修士論文（1949年）において実質的に「相互行為秩序」論の問題圏に踏み込んでおり、Ph.D.論文以降本格的に展開される理論枠組みの一部を先取りしているとの解釈を示した（薄井 2011）。そして、最初の公刊論文である「階級」論文（1951年）が書き上げられていく過程で作用した諸要因を「社会階級論の磁場」として捉え、そうした外的で偶発的な作用因を除去しながら、「相互行為秩序」論の重要な理論枠組みが形成されつつあったことを論じた（薄井 2012）。

この見方からすると、二番目の公刊論文「カモを宥めることに関して：失敗に対する適応の諸相」（Goffman 1952b）[以下、「カモ」論文]では以前の論文よりもゴフマン社会学らしさが現れているのではないかとの予想が自然に成り立つ。その公刊が彼のPh.D.論文提出の前年であり、しかも両論文の執筆時期は一部重なると考えられるだけに、ゴフマン社会学の形成過程を解明するうえで重要な作品だと見なしてよいだろう。

以下本論考では、固有の意味で「ゴフマン社会学（Goffmanian sociology）」と呼び得る特徴が「カモ」論文において初めて本格的な形で出現していることを論証する。次節でまず、いくつかの断片的な手がかりから「カモ」論文が着想・執筆された時期を一定の範囲に絞り込

* 大学教育開発センター

み、掲載雑誌の性格も含め本論文が執筆された環境を特徴づけたうえで、「カモ」論文の概要を筆者なりに整理する。第3節では、「カモ」論文において「ゴフマン社会学」がいかなる意味で“誕生”したといえるのかを、形式と内容の両面から、検討する。形式の面では、ゴフマン固有といわれる叙述スタイルがケネス・パークが提唱しエヴァレット・C・ヒューズが発展させた「異事象併置による透視図法」に由来し、ゴフマンがこの方法を本論文で初めて応用したことについて検証する。また、内容の面では、のちの「相互行為秩序」論における主要な概念や重要な視角が、洗練度に差はありつつ、かなりの程度で確立されていることを示す。

2. 「カモ」論文の概要

(1) 「カモ」論文執筆の経緯

a) 「カモ」論文の着想と執筆の時期

「ゴフマン社会学」がいつ“誕生”したのかという問いに答えるうえで「カモ」論文が鍵の一つを握っているとすれば、最初に、この論文がいつ、どのような経緯で書かれたのかを明らかにしておかなければならない。ところが、彼の修士論文や「階級」論文の執筆の経緯(Winkin 1988; 薄井 2011; 2012)、Ph.D.論文の執筆の経緯(Winkin 1988)については一定程度わかっているのに対して、「カモ」論文では、関連資料は皆無に近く、その経緯はまったく説明されていない。そうした事情にあるため推測に頼らざるを得ない部分もあるが、「カモ」論文執筆の経緯をできるかぎり探り出してみよう。

「カモ」論文の執筆時期に関する直接的な証言は現在のところ一つしかない。シカゴ大学の大学院生だったS・メンドロヴィッツ(Saul Mendlovitz)による証言である。彼によれば、ゴフマンとの親密な交友が続いた期間は1947年から1951年であった(Mendlovitz 2009)。次の引用は、その時期を回顧した発言である。

メンドロヴィッツ:(……) 彼と私は最低でも週に二、三度、大学近くのレストランで会っていた。(……) 彼は論文を書いていて、それについて私は少しばかり内容を知っていたが、その論文が有名な「カモを宥めること」である。(Mendlovitz 2009)

この証言は、「カモ」論文の脚注にある「ソール・メンドロヴィッツとの会話によって示唆を得た」(Goffman 1952b: 463)との記述とも符合する。ただし、この証言からわかるのは、ゴフマンが本論文を執筆していた時期が1947年から1951年のどこかだということである。

「カモ」論文の執筆時期を特定する別の手がかりとし

て、脚注で彼が謝意を表しているエディンバラ大学のJ・リトルジョン(James Littlejohn)の存在が挙げられる。ゴフマンがエディンバラ大学社会人類学科の助手職に就いたのは1949年10月なので、リトルジョンと知り合ったのはそれ以降となる。「失敗(failure)の社会学的問題を最初に私に示唆してくれたのはエディンバラ大学のジェームズ・リトルジョンであった」(Goffman 1952b: 463)と彼が書いている点から、本格的に「カモ」論文の着想を得たのはその時期の後である可能性が高い。

また、ゴフマン晩年の発言も、執筆時期を探るうえで手がかりとなる。発言中の「私が書いた最初の二、三の論文」に「カモ」論文が該当すると考えられるので、本論文は短期間で書き上げられたと推測できる。

私が社会心理学[の論文—引用者]を書くようになったのは、調査プロジェクトなしに論文を当初より書いたからです。私が研究生活を始めた当時、教授には許可を与える大きな権限がありました。そこで私はそうした許可を得ずに論文を書こうとしたので、私が書いた最初の二、三の論文は、よく考えないで即座に書いたようなものです。(Verhoeven [1993]2000: 215-216 —傍点は引用者)

加えていえば、「カモ」論文における引用文献・参考文献のほとんどが1950年から1952年刊のものであるので、『「カモ」論文は1949年10月以降に本格的に着想され、1952年の早い時期までに比較的短期間で書き上げられた⁽¹⁾』といったところが妥当な推論となるだろう。先のメンドロヴィッツの証言を重視すれば、「この論文は1951年中におおた書き上がっていた」とする見方のほうに筆者の解釈は傾く。

b) 「カモ」論文の外的特徴

論文の形式上の特徴からいうと、「カモ」論文はフィールド調査に基づかない論文である。この点でも、上記引用中の陳述「調査プロジェクトなしに論文を当初より書いた」と符合する。簡潔にいうと「カモ」論文は、主に言語学者のD・W・モラー(David W. Maurer)の著書『大がかりな信用詐欺』(Maurer [1940]1999)の考察から「カモを宥める」という社会過程を抽出してそれを一般化し、社会学的著作の知見、ゴフマン自らの経験⁽²⁾や見聞と思われるエピソード、および学友との会話から得た示唆を資料・ヒントにして、あとは論理的構成力により叙述された論文である。

また、掲載雑誌の問題も含め、論文の形式や内容を縛る“環境”に関していうと、「階級」論文のときと「カモ」論文のときとは違いがある。レマートは、社会学的方

法の面からではあるけれども、両論文の違いについて次のように指摘している。

「階級ステイタスのシンボル」(1951年)はかなりスタンダードな社会学である。これと対照的に、「カモを宥めることに関して」(1952年)において彼は、学者の作法にはほとんど配慮せず、手元にある主題に対して彼独自の立場から叙述する方法を初めて開示している。(Lemert & Branaman 1997: xxi-xxii)

「階級」論文が「かなりスタンダードな社会学」に収まってしまった理由は、いくつか考えられる。それらのうち、掲載雑誌の性格が作用したという面は否定できないと思う。筆者は、以前の論考でこう指摘した。

「階級」論文は、英国の権威ある学術雑誌に掲載されたゴフマンの最初の公刊論文であり、その推敲の過程でウォーナーをはじめ何人かの人たちの助言・批評を受け、構成や内容を修正している。その意味で、形式的にも内容的にも、よりアカデミックに洗練された論文になっているけれども、そのせいか、後年の「ゴフマン社会学」らしさは姿をみせていない。(薄井 2012: 5—傍点は原著者)

これに対し、「カモ」論文が掲載された『精神医学：対人過程研究雑誌 (Psychiatry: Journal for the Study of Interpersonal Processes)』は、雑誌の性格がやや異なっていた。『精神医学』は、対人関係論で有名な米国の精神科医H・S・サリヴァン⁽³⁾ (Harry Stack Sullivan) がウィリアム・アランソン・ホワイ研究所の雑誌として1938年に創刊したものである。「精神医学」という名称だが、純医学的な専門雑誌ではなく、文化人類学や社会学などにも開かれた学際的志向をもつ精神医学系の雑誌であった(中野 2011: 35)。

以後ゴフマンは同誌に論文「面子の作業について」(1955年) [以下、「面子」論文] を投稿したほか、論文「精神病患者の精神的な経歴」(1959年)・「場所の狂気」(1969年)を投稿している。後の二つの論文名を見ると「精神医学」寄りになっているようにみえるが、「カモ」論文も含めて『精神医学』に掲載されたゴフマンの諸論文は「精神医学と社会学の収斂」⁽⁴⁾ または「心理学と社会学の収斂」という視点で書かれている。それは、「カモ」論文では、次のような形で表されている。

心理学者の間では価値は人格的なのめり込みだといわれ、社会学者の間では価値は地位、役割または対人関係だといわれる。いずれの場合も、所有されている

価値の特性は、一定の程度まで、それを所有している人物の特性だと理解される。所有されている属性の変更はそれを所有している人物の自己像の変更をもたらす。」(Goffman 1952b: 453—傍点は引用者)

そして、この「精神医学(心理学)と社会学の収斂」という視点は、雑誌『精神医学』からの要請の結果というよりも、ゴフマンが元々もっていた学問上の領域越境的な志向性の現れと見なすべきである。実際、『精神医学』以外で発表された著書『公共の場における行動』(1963年)や論文「精神病の徴候と公共の秩序」(1964年)にも、「精神医学と社会学の収斂」という視点が明確に打ち出されているからである。

以上の点を総合すると、「[指導教授の] 許可を得ず」書いたと思われる「カモ」論文は、『精神医学』という雑誌の学問的なリベラルさと相俟って、最初の公刊論文である「階級」論文のときよりゴフマン社会学らしさが発現しやすい“環境”にあったと見なせる。

(2) 「カモ」論文の主題と構成

さて、次に「カモ」論文の個別の叙述内容の検討に入ることも可能だが、その前に、この論文の全体的な内容を押さえておいたほうがよいだろう。というのも、「カモ」論文すなわち「カモを宥めることに関して：失敗に対する適応の諸相」は、奇を衒ったタイトルであるうえに、章立てや小見出しが一切ないため、正確な全体像がつかみにくい論文になっているからである。

そこで、「カモ」論文に小見出しを付けて整理した内田の解釈(内田 1995: 26-27)を参考にしつつ、基本的には筆者の見解に基づいてこの論文の構成を提示する。全体は「Ⅰ. 序～Ⅱ. 本論～Ⅲ. 結び」という三部構成で、本論が論文の大半を占めていると見なせる。なお、構成と小見出しの内容はすべて筆者によるものである。

Ⅰ. 序

- A) 主題の提示と「信用詐欺」の構造・過程
- B) 「信用詐欺」のメタファーとしての拡張的適用
- C) 社会に遍在する「宥め」という過程

Ⅱ. 本論：失敗に対する地位喪失者の適応過程

- A) 「のめり込み (involvement)」と「地位」
- B) 「のめり込み」から醒める三つの類型
 - ①昇格
 - ②昇格でも降格でもない地位変更
 - ③不本意な地位喪失
 - (a) 当人の不名誉にならない地位喪失
 - (b) 当人の不名誉になる地位喪失

- C) 社会過程としての「宥め」が帰結する「社会における自己」をめぐる一般的な問題
- ①「宥め」の必要性が発生する場面
 - (a)苦情を言う顧客
 - (b)官僚組織で昇進できなかった官吏
 - (c)求婚を断られた人
 - ②「宥め」の典型的な方法
 - (a)適任者に任せること
 - (b)代わりの地位を提供すること
 - (c)失った役割を得る再度の機会を与えること
 - (d)感情をぶちまけさせること
 - (e)興奮が鎮まるまで待つこと
 - (f)引き延ばしをすること
 - (g)お金で補償すること
 - ③「宥め」が拒否された際の地位喪失者が採る諸方策
 - (a)「精神的におかしくなる」こと
 - (b)当局や上級機関に訴えること
 - (c)「興味を失う」こと
 - (d)類似した別の地位を得て「見返す」こと
 - ④「宥め」の必要性を回避する諸方策
 - (a)地位を含む場面を一掃すること
 - (b)「まだ一人前でない者」の失敗は寛容に扱われるということ
 - (c)秘密にしたり本気じゃなかったと言って予防線を張ること
 - ⑤「社会における自己」をめぐる一般的な問い
 - (a)自己像の維持は他者に依存しているということ
 - (b)社会的役割の統合における緩さがもたらすもの
 - (c)「宥め」業では共感禁物ということ
 - (d)自己像をめぐるトラブルの当事者とそれを観て楽しむ傍観者

III. 結び

- A) 地位に就いていた状態から就いていない状態への移行過程の考察
- B) 社会的地位を喪失した者たちの節い分け
 - ①「社会的に」死んだ人たちの収容所
 - ②落伍者が行き着く先
 - ③上から降りてきた者と下から昇ってきた者とが出会う場

タイトルにある「カモ (the mark)」は、信用詐欺における標的=被害者を指す俗語である。信用詐欺に引っかかったカモはその“うまい”話を信じ込み、自分は「成

功者」になれると思い込んで意気揚々とするが、仕組まれた通りに結局“うまい”話は崩れ去り、「失敗者」の地位に突き落とされる。ゴフマンは、信用詐欺で突然自分の安全や地位が失われた状況に対する適応過程を考察することが「私たちの社会におけるのめり込みとのめり込んでいる自己との関係を理解すること」(Goffman 1952b:451)につながるとして、本論文を展開している。

そして、信用詐欺の最終局面でカモ=被害者が警察などに通報したりしないよう詐欺師が鎮静化させる過程が「カモを宥めること (cooling the mark out)」である。ゴフマンは、この過程が地位や自己像が急変する状況全般に組み込まれていると考え、索出的メタファーとして拡張的に適用した。それが「カモ」論文の主題である。この点について論文の最初のほうでこう書いている。

したがってまた、見当違いの期待だけでなく、妥当な期待が裏切られたときにも、宥めが必要になってくる。信用詐欺に関わる人は数少ない社会的場面にしかみられないけれども、宥めを必要とする人は多くの社会的場面にみられる。カモを宥めることは、たいへん基本的な社会的な物語のテーマの一つである。(Goffman 1952b: 452-453—傍点は引用者)

社会生活では思いがけない「地位変更」が生じる。その地位変更には上昇的・水平的・下降的な移動があり、どの場合でもそれに伴って当人の感情の調整が必要になる。この過程が特に重要になるのは、期待した「昇格」が達成できなかったり、当然視していた「現状」が維持できなくなったり、「降格」の憂き目に遭うときで、そうした地位変更には「気持ちの整理」の過程が不可欠となる。この過程を専門とする職業もあるし、それが個人的に遂行されることもあるけれども、「宥め」の過程は社会秩序の必須の“安全弁”として社会の中に組み込まれている。「カモを宥めること」は、種々の形で「面子」を失った人に対して他者がその面子を修復する作業と同型の過程であって、これにより権利と義務のシステムとしての社会秩序が維持されている (Burns 1992: 15)。

以上が「カモ」論文の概要であるが、これを押さえたうえで、ゴフマン社会学の形成史においてこの「カモ」論文がもつ理論上の意義を考察してゆく。

3. ゴフマン社会学形成史上の「カモ」論文の位置

一言でいうと、「カモ」論文は、「形式」と「内容」の双方で、ゴフマン社会学の“雛形”または“先駆け”になっている。形式とは叙述方法のことであり、内容とは論究対象・テーマ・概念のことである。「カモ」論文は、

従来の研究の着目点⁽⁵⁾とは異なる点で、また通常考えられている以上に、ゴフマン社会学の形成上で大きな一歩を踏み出した作品と見なすことができる。

(1) 「異事象併置による透視図法」という叙述方法

理解しやすい方法の面から、「カモ」論文がゴフマン社会学形成にどのように寄与したかを検討してみよう。

そもそもゴフマンは、自らの社会学的方法についてほとんど言及していない。このことが彼の方法論をめぐる“謎”を生み出し、方法論をめぐる数多くの議論を引き起こす一方で、「ゴフマネスク」なる用語でもって彼の方法論に関する議論を封印する結果をもたらした。次のような記述が、おそらく、ゴフマンの叙述スタイルに関して多くの人が抱く一般的な印象であろう。

彼の著作の多くは多種多様な著作からの博引旁証と、彼自身のシェットランド島、精神病院での参加観察、周囲の日常生活の観察に基づく叙述が大半を占め、その間に彼の理論的分析が点綴されるという形を取っている。(石黒 1985 : 33)

「ゴフマネスク」と形容されることもあるこの叙述スタイルは、ゴフマンが一定の考えに基づき自覚的に用いた方法である(内田 1995)。それについて触れている数少ない箇所の一つが次の一節である。最初の著書『日常生活における自己呈示』[以下、『自己呈示』]の「序言」の最後に出てくる文章である。

本書で例証として用いた種々の資料・データは異なる分野からの混成となっている(are of mixed status)。一方の極に信頼できる形で記録された均一現象が適切な形で一般化された立派な研究からの引用があり、他方の極に多種多様な人が書いた非公式の体験記からの引用があるが、多くはその中間に位置する。加えて、シェットランド諸島の小作農コミュニティに関する私自身の研究からも引用している。こうしたアプローチが正当化できるのは(それはまたジンメルのアプローチが正当化できることでもあると考えるが)、例証となる異質な資料・データを一箇所にまとめてみるとそれらが一定の統一的な枠組みに適合的に組み込まれ、そしてその枠組みを通して見ると読者の中にすでにある数々の断片的な経験が一つにまとまり、制度的な社会生活のケース・スタディにおいても適用可能な手引きを研究者に提供するからである。(Goffman 1959 : vi-vii—傍点は引用者)

ここでゴフマンは、自らが採用している叙述方法がジ

ンメルに由来するとも読める書き方をしている(中段の傍点箇所)。確かに、ジンメルの「形式社会学」の視角はゴフマン社会学に大きな影響を与えている。そのことが読み取りやすい箇所を同じ著書から引用しておく。

ある相互行為場面で打ち立てられた作業上の合意と別の場面で打ち立てられたそれとは内容的にかなり異なることは理解しなければならない。例えば、一緒にランチを食べている友人の間では愛情、尊敬、相手への気遣いが互いに持続的に表示される。他方、サービス業では専門家が顧客の問題に公平無私に関わるというイメージを維持し、顧客は専門家の能力と誠実さに対する尊敬の表示をもって応える。だが、内容上のそうした違いを除くと、これら作業上の協定の一般的な形式は同一である。(ibid. : 10—傍点は引用者)

だが、『自己呈示』で示された叙述方法と「形式社会学」の視角とは隔たりがある。すなわち、「異なる分野からの混成」という叙述方法を、ジンメルが積極的に提唱しているわけではないのである。この点からいうと、ゴフマンが採用している叙述方法は、文芸批評家・哲学者のケネス・バーク(Kenneth Burke)が提唱した「異事象併置による透視図法(perspective by incongruity)」⁽⁶⁾に由来すると見なすべきである(Lofland 1980 : 25 ; Manning 1992 : 146 ; 内田 1995 : 28-29 ; Smith 2006 : 21 ; 渡辺 2015 : 29-31)。それは、主に言葉の次元において「異質で相容れないと見なされてきた粒子を組織的に混ぜ合わせること」(Burke [1935]1984 : lv)によって新しい見方を現出させる方法である。この方法を社会学の比較法に発展させたのがゴフマンの師エヴァレット・C・ヒューズ(Everett C. Hughes)であった。その方法について彼が簡潔に述べている一節を引いておく。

人の仕事を比較研究しようとする者は、医者については水道修理工を研究することで、また娼婦については精神科医を研究することで知見を得ることができる。このことが示しているのは、こうした組み合わせの要素間にある期待値以上に類似性があると言っているのではなく、仕事は威信または倫理に応じて格付けされるにもかかわらず、あらゆる種類の仕事が同一の連続体に属しているとの仮定から研究者が出發しているということである。(Hughes [1951]1994 : 79)

ゴフマンが採り入れたのは、こちらのヒューズの比較社会的な方法であった。そして、「ヒューズ版・異事象併置による透視図法」とでもいうべきアプローチをゴフマンが初めて応用したのが1952年公刊の「カモ」論文

だったのである。最初の著書『自己呈示』（1956年・1959年）に先立つ早い時期であることもあって、のちのゴフマンには見られない率直さで、彼は自らの方法の出所について語っている。

本論文で用いようとしているアプローチはシカゴ大学のエヴァレット・C・ヒューズから借用しているが、もし本論文で私がそれを誤って適用していたとしても彼の責任ではない。（Goffman 1952b：463）

このアプローチが「異事象併置による透視図法」だと述べられていないけれども、パーク＝ヒューズの方法がここでゴフマンに継承されたことは間違いない⁽⁷⁾。信用詐欺でそれまで自分が「成功者」だと思っていたカモが突然「失敗者」の地位に突き落とされる事態を、通常それとは結びつけて考えない種々の事態（突然離婚を言い渡された人、突然解雇された人など）と併置することによって、急激な自己像の変更という共通の形式ないし構造を浮かび上がらせようとしたゴフマンの試みが「異事象併置による透視図法」の適用であることは明らかである。信用詐欺のカモを宥める手法に、急激な地位変更を経験した人々を慰める種々の手法をなぞらえてゆく彼の叙述法にも、同じ方法の適用が見て取れる。この叙述法が適用されている他の事例を「カモ」論文から一つ挙げておく。次の引用では、「医師」と「司祭」という異質な職業の併置によって、「死にゆく当人と家族」を「宥める」仕事としての同型性が示されている。

死に関係している人たちのケースでは、宥め役が医者や司祭に任されていることがある。宥め役としての医者の仕事は、家族、そして旅立つ本人がお別れを上手く、最小限の感情的な混乱で処理するのを助けることである。宥め役としての司祭の仕事は、魂を救済することではなくむしろ、死を受け入れられるような魂を創り出すことである。（Goffman 1952b：457）

このように、異質で無関係にみえる諸事象を併置することを通して、それらの重なりの中に見えてくる同型の構造を可視化する方法が「異事象併置による透視図法」である。だとすれば、例えばのちの著書『アサイラム』（1961年）において「孤児院」「結核療養所」「精神病院」「刑務所」「洗脳キャンプ」「修道院」といった性格の異なる諸施設を、同じ「全制的施設」という用語で括るゴフマンの叙述スタイル（Goffman 1961a：4）も、同じ方法の展開と見なすことができる。すなわち、異質な諸事象の併置によって「理念型」を構築し、それを分析装置とし、通常は無関連とされる社会生活の多様な諸領域

に適用するという方法である（Treviño 2003：21-22）。『スティグマ』（1963年）に関しても、同様の方法が用いられているといえる。

K・パークに由来しヒューズが発展させたこの「異事象併置による透視図法」の適用がもたらすのは、多様な社会的場面で生起する諸「内容」の中に共通した「形式」を見いだすジンメル「形式社会学」と、結果的には、同じものだという言い方は可能である。しかし、その「形式」を抽出するための具体的な方法をジンメルは明示していないし、それをジンメルの著作から導き出すことも容易ではない。そうしたジンメル社会学の“隠れた”方法論を、ゴフマンはパーク＝ヒューズの「異事象併置による透視図法」を介して顕在化させたというのが適切な言い方となるだろう。この視点から、『自己呈示』の「序言」で述べられている方法論に関する最後の文を読み返してみると、それがゴフマンなりに消化した「異事象併置による透視図法」であることがわかる。

叙述方法にして索出的比較法でもあるこの方法の応用が「カモ」論文でどこまで成功しているかは別にして、「ゴフマン版・異事象併置による透視図法」が初めて登場したことをもって、方法論上は、「ゴフマン社会学」が「誕生」したといえる。したがって、のちの作品では語られなくなり、いっそう錯綜してゆくようにみえるゴフマンの社会学的方法という問題に関しては、本「カモ」論文における適用例を基本形とすることによって、その変化や展開を理解することができるだろう。

（2）後年の概念、視角および著作との関係

次に、テーマや論究対象およびそれを分析する概念の面で、「カモ」論文がゴフマン社会学の形成史において占める位置について考えてみる。この面においてもまた、本論文がもつ意義は予想以上に大きいといえる。

この場合、大別して、使われている用語に注目する視点と実質的な記述内容に着眼する視点が考えられる。

用語（「宥める」「カモ」など本論文に特有の用語を除く）の出現頻度に着目すると、高い順から「地位」が二十五か所、「自己」が二十二か所、「のめり込み（involve-ment）」「のめり込んだ（involved）」が二十か所、「捉え方（conception）」が十五か所、「面子」が六か所、「当惑」が二か所といった結果が導き出せる。

他方、用語・表現は同一ではないが、のちに展開される重要な概念および視角との類似性や共通性が記述の中に読み取れるケースも少なくない。他の著作になるが、例えば「ドラマトゥルギー」的アプローチが展開された『自己呈示』の末尾でそれが仮設の「足場」だったとして放擲され（Goffman 1959：254）、ゴフマン社会学固有の用語としては二度と登場しないという例もあるので、

用語に拘泥することには注意が必要である。したがって、用語に注目するアプローチと実質的な内容に着目するアプローチとの適切な使い分けが求められる。

a) 「自己像」をめぐる種々の用語

用語の出現頻度で一位の「地位」、二位の「自己」、四位の「捉え方 (conception)」、五位の「面子 (face)」は、別個の用語のようだけれども、すべて「自己像」の言い換え語としてまとめられる。ただし、これらは同一水準の語ではない。「地位 (status)」と「自己 (self)」は一般的な社会学用語であり、意味的にニュートラルであるのに対して、「面子」は本来民族的な観念⁽⁸⁾であり、「名誉」や「誇り」に似て認知的要素と感情的要素が一体化した観念である。そうした違いを踏まえれば、信用詐欺の被害者＝カモの“屈辱”的な「降格」体験を論じる際には、「面子」という用語のほうがより適格的である。「カモ」論文における用例を見てみよう。

したがって、実質的な喪失に加えて面子の喪失 (loss of face) が生じる。(……) 私が特に関心をもっているのは、この二番目の喪失——不面目 (humiliation) に関係する種類の喪失——である。(Goffman 1952b : 454—傍点は引用者)

「カモ」論文において「面子」の意味で“face”の語が使われているのは六か所であり、「面子を立てること (face-saving)」(Goffman 1952b : 454) や「面子の喪失」(ibid.) といった表現もみられる。T・バーンズは、「カモ」論文における「失敗」と「面子」の関係に関して次のようにまとめている。

失敗したという事実 (The fact of failure) は、本質的に、自尊心の喪失であり、それは「面子」の喪失に起因する。そして面子の喪失はというと、人が自分自身について抱いている自己像に恥じない行動をし損なった結果である。(Burns 1992 : 15—強調は原著者)

これらの点から、単純に「カモ」論文は三年後の「面子」論文の前駆をなしているということはいえる。しかし、「面子」という観念は、ゴフマンが一時的に仮託した語であって、「面子」論文以後、ゴフマン社会学固有の用語として登場することのないものである。

そうすると、ゴフマン社会学の用語として注目すべきなのは、もう一つの用語「捉え方 (conception)」であろう。なぜかという、この用語は「面子」など「自己像」に関連する用語を包含する上位の概念と考えられるからである。「自己の捉え方 (self-conceptions)」といった訳

語ぐらいしか思いつかないこの用語が意味しているのは、「人が自分自身をどのような存在と捉えているかということ」である。「[地位] 喪失者が自分自身をどのような存在と捉えているかということ (the conception the loser has of himself)」(Goffman 1952b : 454) や「他者が [地位] 喪失者をどのような存在と捉えているかということ (the conception others have of him)」(ibid.) といった用法もみられる。「面子の喪失」と「[地位] 喪失者が自分自身をどのような存在と捉えているかということ」を比べたとき、後者のほうが明らかに汎用的である。しかも、「[地位] 喪失者」や「自分自身」を別の語に入れ換えれば、いくつもの組み合わせが可能である。

「カモ」論文において初めて本格的に登場する「捉え方 (conception)」という用語⁽⁹⁾は、用法を分化させながら、直後のPh.D.論文(1953年)にたびたび登場し、他の著作にも顔を出す“隠れたキーワード”だといつてよい。Ph.D.論文から一例を引いておこう。

どの言葉やジェスチャーを通して、参加者が自分自身をどのような存在と捉え、そしてその場に居合わせる他の人たちをどのような存在と捉えているか (his conception of himself and his conception of the others present) は伝わってしまい、どの言葉やジェスチャーもこうした捉え方の表現として他者に受け取られる。(Goffman 1953 : 299)

後者の「その場に居合わせる他の人たちをどのような存在と捉えているか」を表す言語・表出行動は、論文「表敬行為と品格行為の本性」(1956年)では「個人が示す別の個人に関する評価 (the appreciation an individual shows of another)」(Goffman 1967 : 77)を表す「表敬行為 (deference)」という“衣”をまとい、前者の「自分自身をどのような存在と捉えているか」を表すそれは「品格行為 (demeanor)」という“姿”をとっている。また別の著書では、それぞれに「[相手に対する] 丁寧さ (politeness)」(Goffman 1959 : 107)と「[自らの振舞いの] 上品さ (decorum)」(ibid.)の語が充てられている。

これらの語を通底する、より分析的な用語として「捉え方 (conception)」概念をゴフマンが自覚的に用いていることは、同時期のPh.D.論文草稿 (Goffman 1952a) において「彼が自分自身および居合わせる人たちをどのような存在と捉えているかということ (the conception he has of himself and of those present)」という言い回しが使われていることから裏付けられる。「捉え方」概念に関するゴフマンの認識は、「カモ」論文の執筆段階で、Ph.D.論文とほぼ同じ水準に達していたと考えられる。

b) 「のめり込み (involvement)」概念

「カモ」論文で次に多く出現するゴフマン社会学固有の用語は、「のめり込み」⁽¹⁰⁾ (involvement) または「のめり込んだ (involved)」である。

ある地位に「のめり込んだ」状態とは、自分がその地位に相応の人物だと“信じ切っている”状態、その地位に付随した自己像を自分自身だと“思い込んでいる”状態を指す。例えば信用詐欺では、カモは当初「成功者」という地位に「のめり込んだ」状態、すなわち自分は「成功者」だと思い込んだ状態にある。客観的に見ると、これは“騙された”状態である。この状態が最後に突然覆されて、カモは「失敗者」という地位に突き落とされ、以前の「のめり込んだ」状態から“醒める”。こうした認知的かつ感情的な没入およびその生滅を表す用語として、ゴフマンは「のめり込み」という語を用いようとしている。その用例を二つ挙げておこう。

私たちの社会では、人ののめり込みの物語 (the story of a person's involvement) は三つの一般的な様式のうちの一つで終わる。その終わり方の一類型として、人は、これまでののめり込みまたは役割から身を引いて、それに接続する、より上等ののめり込みまたは役割を得ることがある。青年が大人になったり、医学生が開業医になったり、下士官が将校に任命されるケースがそれである。(Goffman 1952b: 453—傍点は引用者)

もちろん、地位をめぐる物語の一般的な終わり方には三番目のものがある。人が不本意に自分の地位あるいはのめり込みを奪われ、より劣った地位あるいはのめり込みを強制されることである。宥めが必要な状況が発生するのは、人の役割に対するこの三番目の終わり方においてである。(ibid.—傍点は引用者)

ただし、この「のめり込み」概念は、「カモ」論文では未分化なところがある。すなわち、この段階での「のめり込み」には、一方で「愛着」などの語と置き換え可能な用法と、他方で、後年「相互行為秩序」論で重要概念になる狭義の「のめり込み」概念の用法とが混在している。前者の用例は、例えば「面子」論文では、次のような記述になっている。

一般に、特定の面子への愛着 (a person's attachment to a particular face) があると、面子をつぶす情報が自分および他者から容易に伝えられることもあって、他者との接触に参加することが投獄であるように感じられることもある。(Goffman 1967: 6—傍点は引用者)

他方、狭い意味での「のめり込み」概念は、Ph.D.論文や論文「相互行為からの疎外」(1957年)をはじめ、『出会い』(1961年)や『公共の場における行動』(1963年)の著書で詳述される。「焦点のある相互行為」を存立させる両輪である「フレーム」の適用と「のめり込み」の発生というときの「のめり込み」である。この場合、「のめり込む」対象は地位・自己像というより場面における活動である。また「のめり込み」は持続的ではなく一時的な現象である。代表的な記述を挙げておこう。

機会が与えられた活動への没頭は、その活動への認知的および感情的な熱中を意味し、その人の心理生理的な資源の動員を意味する。要するに、その活動にのめり込んでいる (be involved in it) のである。(Goffman 1963b: 36—強調は原著者)

そして、「地位」を「リアリティ」に置き換えて、「カモ」論文における「のめり込み」の働きを再考してみると、場面的相互行為に対する「カモ」論文の捉え方は、『自己呈示』のそれと近いことがわかる。次の記述における「パフォーマー」の立場に最も適合するのは、信用詐欺で騙されている「カモ」だと思う。

一方の極には、パフォーマー [カモ—引用者] が自分自身の行為に完全に取り込まれている (be fully taken in) 事態がある。すなわち、彼は自分が上演しているリアリティの印象が本物の現実 (the real reality) であると心から確信している。(Goffman 1959: 17)

信用詐欺で“騙された”状態にあるカモは、目の前で展開されている出来事を「本物の現実」だと思い込んでいる。一方、騙す側にいる“醒めた”信用詐欺師は、自分の行為が生み出すリアリティが「本物の現実」だとはまったく思っていない。上の引用と同頁にある次の一節のパフォーマーを今度は「信用詐欺師」と「カモ」に置き換えてみると、いっそう理解しやすくなる。

他方の極には、パフォーマー [信用詐欺師—引用者] が手順の決まった自身の演技にまったく取り込まれていないという事態がある。(……) ある個人が自身の行為を本気で行っておらず、オーディエンスが抱いている確信にも最終的な関心を抱いていない場合、そうした個人をシニカルと呼ぼう。そして、「真面目で素朴な (sincere)」という用語は、自分自身のパフォーマンスが生み出す印象を本気で信じている人 [カモ—引用者] を指す言葉として取っておこう。(ibid.)

こうした読み換えが決して強引な深読みでない根拠として、この記述の脚注に「信用詐欺師」への言及があることに加えて、同書の別の箇所では「舞台俳優」の仕事と「信用詐欺師」の仕事をパラレルに置いたり (*ibid.* : 70)、「劇場のパフォーマンスあるいは仕組まれた信用詐欺 (a staged confidence game)」(*ibid.* : 73) と、両者を互換的に扱っていることが挙げられる⁽¹¹⁾。

「カモ」論文の考察内容の単純な延長上にあるわけではないが、場面的相互行為の「リアリティ」をめぐる「のめり込み」の問題は、『出会い』『公共の場における行動』を経て、後期の大著『フレーム分析』(1974年)にまで引き継がれた可能性が高い。さらに、ゴフマンが「カモ」論文で基軸のメタファーとした「信用詐欺」の構図は、「フレーム分析」の基本的な視角を提供したのではないかという想定も出てくる。というのも、『フレーム分析』には「大がかりな信用詐欺」の記述が何か所かに登場し (Goffman 1974 : 122 ; 165)、また信用詐欺こそ最適の例と思われる「搾取的な偽装 (exploitative fabrication)」 (Goffman 1974 : 103-111) も主要な用語に位置づけられているからである。これらの論点に関しては別途検証する必要があるが、「信用詐欺」のメタファーとしての射程は広範囲に及んでいる可能性が高い。

c) 「当惑」とその回避策

「面子」より出現頻度はずっと低いけれど、重要度はそれ以上だと思われる語が「当惑 (embarrassment)」である。信用詐欺にはめられたカモが突然「失敗者」になったと気づいたときの感情は「当惑」であろう。ただ、「カモ」論文が「当惑」に関連する事態を扱っているといっても、「当惑」そのものを主題にしているわけではない。実際、「当惑」の語が「カモ」論文に出てくるのは二か所だけである (Goffman 1952b : 457 ; 461)。しかし、「当惑」の語の出現という表層ではなく、論述の実質的な内容を考慮すると、「当惑」のテーマは「カモ」論文の“通奏低音”となっていると見なすことができる。Y・ヴァンカンとW・リーズ-ハーウィッツはこの点を適切に捉えて、こう述べている。

1952年に『精神医学』誌で公刊された奇妙なタイトルの論文「カモを宥めることに関して：失敗に対する適応の諸相」は、「君はずっと騙されていたのだ」といわれたとき、「君は配偶者から離婚を突きつけられるだろう」または「君は会社から解雇されるだろう」といわれたときのような、個人に起こる極端な当惑の状況を扱っている。(Winkin & Leeds-Hurwitz 2013 : 136-137—傍点は引用者)

この「当惑」を主題にした論文が四年後の「当惑と社会組織」(1956年) [以下、「当惑」論文] であるが、これと「カモ」論文との連続性は、両論文の記述の共通性からも裏付けることができる。「当惑」論文の次の一節には、「カモ」論文で取り上げられている事例と同じものが記述されている (傍点部分)。

個人によって投企された自己に疑惑がかけられ、彼がもっているものや自身および相互行為に対して行ってきたことをめぐって恥と当惑が引き起こされる古典的な状況が存在している。例えば結婚や昇進によって地位の突然の変更を経験することは、他の人たちが以前の自己に対する執着をなかなか捨てきれないために完全には認めることのない新しい自己を獲得することである。(Goffman 1967 : 106—傍点は引用者)

そして、「カモ」論文における「当惑」的テーマは、当惑が発生する状況の考察だけでなく、当惑を引き起こす状況の回避など「当惑」防止のためのコントロール策の考察にも及んでいる。「カモ」論文では「当惑」への対処法として「当人を宥めること」が主題的に論じられているけれども、その末尾で「宥め」が必要になる事態そのものを回避するという方策に触れている。

その人物が偽りの権利主張をし、本当はそうでない何者かとして自分を定義していることを証明する出来事はその人物の自己像を崩壊させる。当該人物がもつ自己像が否定されその信憑性が失われたことを他者が気づいてしまうと、他者の見地からはその人物像は崩壊する。もし、自己像と相反する事柄をその人物が秘密にしておくことができれば、自分以外のすべての人が自分を失敗者として扱わないようにできるかもしれない。(Goffman 1952b : 461—傍点は引用者)

これは、「スティグマをもつ人 (the stigmatized)」のうち「信用を失う可能性のある者 (the discreditable)」が置かれた状況によく似ている (Goffman [1963b]1968 : 41-42)。スティグマをもつ人に限らず、対面的相互行為場面で投企され維持されている状況の定義および自己像を脅かす情報つまり「破壊的情報」(Goffman 1959 : 141) が本人または他者からもたらされる危険性がつねにあるが、こうした情報の露呈を防ぐ方策などをのちにゴフマンは「自己に関する情報の管理」(Goffman 1953 : 71-89) や「情報コントロール」(Goffman [1963b]1968 : 41-104) の項目で考察している。「秘密にしておく」ことは、その最も単純な方策であろう。

また、「カモ」論文の最後のほうで「社会における自

己」の問題を論じている次の一節は、『自己呈示』で独自の用語として示される「オーディエンス分離 (audience segregation)」(Goffman 1959 : 49) を実質的に先取りしている。

これはもっと重要なことだが、人がこうした深刻な当惑に耐える能力をもっているということは、その人の複数の社会活動を組織化するに際して一定の緩みがあり、相互浸透が欠如していることを意味している。ある男性は、仕事で失敗するかもしれないが、妻とはうまくやっているかもしれない。(……) 彼は東に向かう列車で全財産を騙し取られるかもしれないが、田舎に帰れば何もなかったかのように振る舞えるかもしれない。(Goffman 1952b : 461—傍点は引用者)

こうした情報コントロールの具体的な方策に関して「カモ」論文は、その末尾でいくつかの事例を取り上げているだけである。だが、「当惑」状況をコントロールする諸方策への着目はゴフマンの中で確実に生じているといえる。この点をバーンズは的確に捉えて、次のように指摘している。

その論文〔「階級」論文—引用者〕が公刊される前であっても、1950年代後半に出版される相互行為に関する初期論文で使う予定の研究材料の種類について語っている——人々が単に状況を定義するのではなく、彼らがいる状況をどのようにしてコントロールしているか、そしてその試みにおいて彼らが直面する失敗や災難をどのようにしてコントロールしているか——。(この種のテーマを扱った最初の論文「カモを宥めること」は、彼がPh.D.論文を提出する前に公刊されている。)(Burns 1992 : 11-12—傍点は引用者)

d) 「精神病患者」と「アサイラム」への関心

最後に、これはあまり目立たないが、「カモ」論文の末尾には、ゴフマンが地位剥奪者としての「精神病患者」と「アサイラム」としての「精神病院」への関心をこの時期から抱いていたことが読み取れる記述がある。

何よりもまず、重要な点で〔社会的に—引用者〕死んだ人たちが人里離れた共同墓地に—一か所に集められるという劇的な過程が存在する。彼らにとって、ここは罰を受ける場所であると同時に避難所でもある。最もわかりやすい例が、たぶん、刑務所 (jails) と精神病院 (mental institutions) だが、他にも重要な例が存在している。(Goffman 1952b : 463—傍点は引用者)

この記述から、「カモ」論文の段階でゴフマンは「精神病患者」を“まともな市民”という地位を剥奪された者と見なし、彼らを“市民社会”から隔離収容する施設として「精神病院」を位置づけていたことがわかる。

こうした見方は、本論文の十年以上後に出された著書『公共の場における行動』にほぼそのままの形で引き継がれている。エチケットやマナーという振舞いのルールを遵守できない「精神病患者」が“まともな市民”としての地位・資格を剥奪され排除されるとしながら、この著作は以下の文章で締め括られている。一部用いている語こそ違え、「刑務所」と「精神病院」を対にした表現は、二つの作品で驚くほど似ている。

個人は、家族やクラブに属している以上に、階級や性別に属している以上に、そして国に属している以上に、集まりに属しているものであり、会費を全額払い込んだその優良会員であることを示すに越したことはない。この〔振舞いの—引用者〕ルールを破ることに對する最終的な罰は厳しいものである。法的秩序を侵犯した人々を刑務所 (jails) に押し込めているのと同様に、場にふさわしくない振舞いをする人々の一部を精神病院 (asylums) に押し込めている。刑務所が私たちの生命と財産を守るための施設であるのに対し、精神病院は私たちの集まりと場を守るための施設である。(Goffman 1963b : 248—傍点は引用者)

他でも「一人前の人から患者への移行 (his transition from person to patient)」(Goffman 1961a : 140) といった表現がみられ、「精神病患者」を、振舞いのルールが遵守できないために「人 (person)」という地位から降格された者と見なすゴフマンの視点は、早期の段階で成立し、ほぼ一貫して保持されていたとみられる。

そして、精神病患者を「重要な点で〔社会的に〕死んだ人々 (persons who have died in important ways)」 「もはや人ではない者 (ex-persons)」(ibid.) と捉えるゴフマンの視角は、Ph.D.論文における、相互行為上の「デイスフォリア」を生み出す人々としての「欠陥のある人々 (faulty persons)」(Goffman 1953 : 258-262) の議論や、精神病患者を含むいくつかのタイプの人々に適用される「人でない者 (non-person)」(ibid. : 222) という非カテゴリー的なカテゴリーの議論との関連が予想される。

一方、のちに『アサイラム』に収録される「全制的施設」に関する論考は、1955年から1956年にかけて行われたセント・エリザベス病院での調査を経て、まとめられていった。そのデータ等によってゴフマンが描き出した全制的施設としての精神病院は、「〔社会的に〕死んだ人々」が行き着く「共同墓場」(Goffman 1952b : 463)

ではなく、人格・自己を備えて生きている精神病患者たちの「自己が体系的に死に至らしめられる (mortified)」(Goffman 1961a: 14) 場所であった。「まともな人 (a person)」でないとして社会から“抹殺”された精神病患者が、さらに精神病院内で惨めな“降格”の扱いを受けるという事態である。ここから翻ってみると、「カモ」論文段階での「アサイラム」に対する認識は、外側からの浅い見方にとどまっていたといえる。だが、ゴフマンが1954年に国立精神衛生研究所の社会・環境研究実験室の客員研究員になり、1955年から精神病院で観察の参与の調査に入ってゆく原動力になったのは、「カモ」論文段階で彼が抱いていた「精神病患者」と「精神病院」への強い関心であったことは間違いない⁽¹²⁾。そして、こうした精神病患者と精神病院への一貫した関心がゴフマン社会学に深みと奥行きをもたらす契機になったことは、もっと注目されてよいと思う。

4. 結びに代えて

以上、アーヴィング・ゴフマンの二番目の公刊論文である「カモ」論文(1952年)を検討対象として、この論文がゴフマン社会学の形成過程において占めている理論上の位置およびその意義について考察してきた。

時間をかけて十分練られた論文ではないけれども、教授の指導を受けず、しかも学問の領域区分に寛容な学術雑誌に掲載されたという事情は、すでに形成されていたと思われるゴフマン独自の社会学的な志向性を発現しやすくするものであった。こう考えると、时期的に近接する最初期二論文と「カモ」論文が内容的に異なっていることに納得がゆく。固有の意味で「ゴフマン社会学」といえる視角や概念が、修士論文(1949年)では片鱗のようなものでしか見出せず(薄井 2011)、「階級」論文(1951年)でも読み込まなければ気づきにくいものであったのに対し(薄井 2012)、「カモ」論文では判別しやすい形で現れている。この差異は、時間の経過に伴う理論的な発展というより、外的な制約の強弱の結果と見なすべきだというのが筆者の考えである。繰り返しになるが、ゴフマンが「相互行為秩序」論をPh.D.論文のためのシェトランド諸島調査のどこかの時点で“突然”着想したというストーリーは不自然である。筆者は、ゴフマンの修士論文を考察した以前の論考で、こう述べた。

だが修士論文提出時、彼はすでに27歳になっていた。知的に早熟だったゴフマンが、この段階になっても、社会学における彼独自の視角の片鱗すらみせていなかったとすれば、むしろそのことのほうが不自然である。それに、博士論文[Ph.D.論文]の研究テーマ

で彼の生涯の研究テーマとなる「相互行為秩序」論が、直前に書き上げた修士論文と全く無関係に発想されたと考えるのにも無理がある。(薄井 2011: 73)

本論考の「3.」で明らかにしたように、ゴフマン社会学に特徴的な視角や概念のうち重要ないくつかは「カモ」論文で顕在化しており、しかも十年後、二十年後も基本的には変わっていないようにみえる。こうした印象は、Ph.D.論文で定式化された「相互行為秩序」論の骨格に、以後三十年かけて肉付けがなされていったという事実とも整合的である。また、「カモ」論文で初めて応用された「異事象併置による透視図法」という叙述法は、データの均一性が求められたPh.D.論文では用いられなかったけれども、その後、主要な著書において使われ、二十年以上後の『フレーム分析』でも適用されている。これらの点から導き出されるのは、ゴフマン社会学の驚くほどの一貫性という特徴である。

そうだとすれば、筆者の仮説、すなわち、固有の意味での「ゴフマン社会学」が成立した時期はPh.D.論文より前の時期に遡るという仮説は、現在のところ保持される。では、その成立の時期が「カモ」論文段階なのかというと、そう断定することはできない。ヒューズ流の「異事象併置による透視図法」を初めて応用した点で「カモ」論文は、方法論上は初期の主著『自己呈示』(1956年・1959年)に先立って「ゴフマン社会学」の“誕生”と見なせるが、「相互行為秩序」論の形成という面からいうと“成体”の姿になっているとはいえないからである。いくつかの部位が姿を現し、全体の輪郭が何となく整ったといったところか。G・スミスはゴフマンの修士論文(1949年)が「ゴフマン社会学」以前の段階にあるとして、「さなぎのゴフマン (a chrysalid Goffman)」(Smith 2003)と呼んだ。この解釈に対して筆者は、この段階でゴフマン社会学は形成されつつあり、修士論文はそれまでの“しがらみ”を脱ぎ捨てていった跡という意味で「ゴフマン社会学の脱皮の跡(抜け殻)」であると形容した(薄井 2011)。では、“脱皮”したゴフマン社会学の“成体”はどこに姿を現しているのか。関連資料がごく乏しい現状において、これを確証するPh.D.論文以前の証拠を見つけ出すことはきわめて困難である。今のところ私たちは、「カモ」論文という磨りガラス越しにゴフマン社会学の「原型」に迫ることしかできない。そこにみえる「原型」の姿に関していえば、“羽化=誕生”していることはほぼ確かなのだけれども“成体=完成体”になったかどうかは判別がつかないというものである。この間筆者が行ってきたゴフマンの修士論文・「階級」論文・「カモ」論文の検討により、確実にゴフマン社会学の「原型」に近づいているという手応えが感じられる。だが、明瞭な

輪郭をもったゴフマン社会学の原像を捉えたという境地には到っていない。この薄ぼんやりした感じを突破するためには、個別に考察してきた最初期の三論文を、Ph.D.論文につながるいくつかの視角と概念を軸に、関連し合う一つの全体として改めて考察してゆくことが必要である。これが筆者の次の課題となるだろう。

【註】

- (1) ゴフマンがPh.D.論文の草稿 (Goffman 1952a) をシカゴ大学に提出したのが1952年5月、アンジェリカと米国で結婚式を挙げたのが1952年6月であり、さらに「夫婦は二、三ヶ月をパリで過ごした」(Raab 2008: 126) との記述もあるので、「カモ」論文の執筆完了は1952年の早い時期と考えたほうが自然である。
- (2) D・N・シャーリンは、この側面を捉えて、ゴフマンの社会学上の著作が彼の「セルフ・エスノグラフィ」であると主張している (Shalin 2010)。シャーリンが指摘しているように、「例えばアメリカでは、自分たちの社交界で結婚し損なったアッパークラスの女性は、上層ミドルクラスの専門職の男性と結婚するという認められたルートに従うかもしれない」(Goffman 1952b: 463) の記述は、アンジェリカとゴフマンの結婚そのものであるといってよい。「カモ」論文には、それ以外にも、ゴフマン自身の経験ではないかと疑われるエピソードがある (ibid.: 456)。
- (3) ゴフマンとH・S・サリヴァンとの関係は、それ自体、追究に値するテーマである。例えばサリヴァンの「選択的非注意 (selective inattention)」概念は、ゴフマン社会学に二つの点で影響を及ぼしたと考えられる。一つは、「フレーム」を適用する際の「非関連化ルール (rules of irrelevance)」(Goffman 1961b: 19) への影響である。もう一つは、サリヴァンの名には触れていないが、「儀礼的無関心 [市民の礼儀としての非注意] (civil inattention)」が「選択的非注意」に関係している可能性である。また、ゴフマンが精神病院のフィールド調査先として選んだのが、サリヴァンが長く関わったセント・エリザベス病院であったことも単なる偶然とは思えない。
- (4) 実際ゴフマンは『精神医学』の第20巻第3号 (1957年) に「社会学と精神医学の収斂について」というタイトルの論文を寄稿している。この論文も含めた「ゴフマンと精神医学」というテーマに関しては、別途考察するつもりである。

- (5) 従来の研究では「カモ」論文を「詐称と欺瞞」のテーマと関連づけるものが多い (Manning 1992; Smith 2006)。「彼の『カモを宥めることについて』(1952年) では、見事なごまかし手にすでに味方していることを読者は心にとめておくべきである」(Winkin & Leeds-Hurwitz 2013: 48) も着眼点は似ている。
- (6) “perspective by incongruity”には「不協和によるパースペクティヴ」(内田健)、「矛盾により開ける視界」(石黒毅)、「不調和によって得られるパースペクティヴ」(渡辺克典) の訳語が充てられてきた。筆者は、石黒の以前の訳語「異質事象併記の視角」(石黒 1985: 33) にある「異質事象併記」を活かして「異事象併置による透視図法」としたほうが、原語が意味している内容を表すと考えている。
- (7) K・バークからヒューズを経てゴフマンに採り入れられた「異事象併置による透視図法」の継承関係については、次の整理が過不足ない説明になっている。

ロッド・ワトソン (1999) が示しているように、相互行為秩序に対するゴフマンの分析的な関心および彼の特徴的な叙述スタイルを理解する鍵は、文学理論家ケネス・バークが「異事象併置による透視図法」と命名した技法にある。ヒューズはこの技法を、高い地位のグループの仕事と低い地位のグループの仕事、例えば医者と娼婦といった、通常は同一の問題を共有していると見なされない人たちの仕事を連続的に比較するという形で用いている。その目的は、二つの異質なグループを慎重に比較することで、仕事にまつわる興味深い事柄を明るみに出すことであった。ワトソンは、通例は自明視されている対面的相互行為の諸特性を明るみに出すためにゴフマンが一連の隠喩および直喩を用いて同じことをしている様態を示している。(Travers 2001: 51)

- (8) 英語の “lose one’s face” などにある「体面」「面目」の意味の “face” の用法が中国語「面子」からの翻訳借用であるというのは有名な話である。
- (9) “conception” の用語がゴフマンの著作に初めて登場するのは「カモ」論文ではない。「階級」論文の基になったセミナー・レポート「社会組織におけるステイタス・シンボルの機能」(1948年) に「自己の捉え方 (a conception of the self)」が登場し、

「階級」論文にも「自分自身および彼らに関する彼の捉え方 (his conception of himself and them)」といった言い回しがみられる。ただし、それは散見されるという程度で、本格的な登場は「カモ」論文が最初である。

- (10) “involvement” には「関与」の訳語が与えられ、ほぼ定着している観があるが、筆者はあえて「のめり込み」の訳語を提案する。ゴフマン社会学の用語としての “involvement” は、例えば “He was involved in completing a jigsaw puzzle.” (ジグソーパズルの完成に夢中になっていた) の “involved” の語義が最も近い。この語義を活かす日本語として、今のところ「のめり込み」が次善の訳語になると考えている。
- (11) 『自己呈示』では、実際は、「仕組まれた信用詐欺」のほうがメタファーとして適合的であったのではないかという疑問が生じる。「ドラマトゥルギー」で一躍有名になった著書であるけれども、「序言」で早々「劇場のパフォーマンス」のモデルとしての欠点を述べているのは奇妙だし、それがゴフマンの無理な立ち位置を表しているとも解釈できる (Goffman 1959 : xi)。また、「サクラ (skill)」といった信用詐欺を連想させる語も議論の中に組み込まれている (*ibid.* : 146)。さらにいえば、『自己呈示』のキーワードの一つになっている「チーム (a team)」という用語自体が、「劇場のパフォーマンス」よりも「仕組まれた信用詐欺」に適合するように思われる。
- (12) ゴフマン社会学理論と彼の生活誌とは密接な関係があるとするD・N・シャーリンは、1964年に自殺したゴフマンの最初の妻アンジェリカが「精神障害 (双極性気分障害)」に長く苦しんでいたことがゴフマンの「精神病患者」への関心の背景になっていた事情を詳しく論じている (Shalin 2013)。

[文献]

- Burke, Kenneth, [1935]1984, *Permanence and Change* [Third Edition with a New Afterword], California : University of California Press.
- Goffman, Erving, 1952a, “Draft of Ph.D. Thesis Statement,” in Dmitri N. Shalin (ed.) *The Erving Goffman Archives*. (<http://cdclv.unlv.edu//ega/>)
- , 1952b, “On Cooling the Mark Out : Some Aspects of Adaptation to Failure,” *Psychiatry : Journal for the Study of Interpersonal Processes* 18, 3 : 451–463.

- , 1953, “Communication Conduct in an Island Community,” unpublished Ph.D. dissertation, Department of Sociology, University of Chicago, in Dmitri N. Shalin (ed.) *The Erving Goffman Archives*. (http://cdclv.unlv.edu//ega/documents/eg_phd.pdf) [2016年9月10日8時25分閲覧]
- , 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, New York : Doubleday Anchor.
- , 1961a, *Asylums : Essays on the social situation of mental patients and other inmates*, New York : Doubleday Anchor.
- , 1961b, *Encounters : Two Studies in the Sociology of Interaction*, Indianapolis : The Bobbs-Merrill.
- , 1963a, *Behavior in Public Places : Notes on the Social Organization of Gatherings*, New York : The Free Press.
- , [1963b]1968, *Stigma : Notes on the Management of Spoiled Identity*, New York : Penguin Books.
- , 1967, *Interaction Ritual : Essays on Face-to-face Behavior*, New York : Doubleday Anchor.
- , 1974, *Frame Analysis : An Essay on the Organization of Experience*, New York : Harper & Row.
- Hughes, Everett C., [1951]1994, *On Work, Race, and the Sociological Imagination*, Chicago : The University of Chicago Press.
- 石黒 毅, 1985, 「儀礼と秩序—初期のゴフマン社会学における表出の機能論的微視分析—」, 『現代社会学』第11巻第1号, 京都 : アカデミア出版会.
- Lemert, Charles & Branaman, Ann.(eds.), 1997, *The Goffman Reader*, Massachusetts : Blackwell.
- Manning, Philip.1992, *Erving Goffman and Modern Sociology*, Cambridge : Polity.
- Maurer, David W., [1940]1999, *The Big Con : A Story of the Confidence Man*, New York : Anchor Book.
- Mendlovitz, Saul., 2009, “Erving Was a Jew Acting Like a Canadian Acting Like a Britisher,” in Dmitri N. Shalin (ed.), *Bios Sociologicus : The Erving Goffman Archives* (http://digitalscholarship.unlv.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1048&context=gooffman_archives) [2016年8月26日15時25分閲覧]
- 中野明德, 2011, 「H. S. サリヴァンの生涯と対人関係論」, 『福島大学総合教育研究センター紀要』第11号.
- Raab, Jürgen, 2008, *Erving Goffman*, Konstanz : UVK Verlagsgesellschaft mbH.
- Shalin, Dmitri N., 2010, “Erving Goffman as a Pioneer in Self-Ethnography? : The “Insanity of Place” Revisited,” in

- Dmitri N. Shalin (ed.), *Bios Sociologicus: The Erving Goffman Archives* (http://digitalscholarship.unlv.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1079&context=goffman_archives) [2016年9月6日9時12分閲覧]
- , 2013, “Goffman on Mental Illness: Asylums and “The Insanity of Place” Revisited,” *Symbolic Interaction* 37,1 : 122-144.
- Smith, Gregory W.H.(ed.), 1999, *Goffman and Social Organization*, London and New York : Routledge.
- , 2003, “Chrysalid Goffman: A Note on “Some Characteristics of Response to Depicted Experience,” *Symbolic Interaction* 26, 4 : 645-658.
- , 2006, *Erving Goffman*, London and New York : Routledge.
- Travers, Max, 2001, *Qualitative Research Through Case Studies*, London : Sage
- Treviño, A.Javier (ed.), 2003, *Goffman's Legacy*, Lanham : Rowman & Littlefield Publishers.
- 薄井 明, 2011, 「ゴフマン社会学の脱皮の跡—彼の修士論文（1949）に関する一考察—」, 『北海道医療大学看護福祉学部紀要』第18号.
- , 2012, 「社会階級論の磁場の中のゴフマン社会学—彼の最初の公刊論文（1951）をめぐるとの考察—」, 『北海道医療大学看護福祉学部紀要』第19号.
- 内田 健. (1995) 「「ゴフマネスク」とは何か?—E. ゴフマンの著述スタイルをめぐって—」, 『早稲田大学人間科学研究』第8巻第1号.
- Verhoeven, Jef C., [1993]2000, “An Interview with Erving Goffman, 1980,” in G.Fine & G.Smith (eds.) *Erving Goffman* [1], London : Sage.
- 渡辺克典, 2015, 「ゴフマネスク・エスノグラフィー」, 中河伸俊・渡辺克典（編）『触発するゴフマン:やりとりの秩序の社会学』, 東京:新曜社.
- Winkin, Yves, 1988, *Les Moments et Leurs Hommes*, Paris : Seuil.
- Winkin, Yves & Leeds-Hurwitz, Wendy, 2013, *Erving Goffman: A Critical Introduction to Media and Communication Theory*, New York : Peter Lang Publishing.

Just Emerged Goffmanian Sociology : A Note on Goffman's Second Published Essay (1952)

Akira USUI*

Abstract : In his Ph.D. dissertation(1953), Erving Goffman established the framework for the theory on the interaction order, elaborations and enrichments of which he pursued as a lifework. One year before the dissertation, his second published essay, "On Cooling the Mark Out"(1952), where he compared a variety of consoling processes in sudden loss of status to cooling the mark out in a confidence game and discerned similar interpersonal forms in them, came out in journal *Psychiatry*. The author give the paper a status of the "emergence" of Goffmanian sociology in that he first applied "perspective by incongruity" which Kenneth Burke had coined and then Everett C. Hughes had developed into a comparative sociological method and in that Goffman had already utilized important terms and ideas in his sociological theory such as conception of oneself, involvement, embarrassment, asylum.

Key Words : On Cooling the Mark Out, loss of status, involvement, embarrassment, perspective by incongruity, Goffmanian sociology

* Center for Development in Higher Education